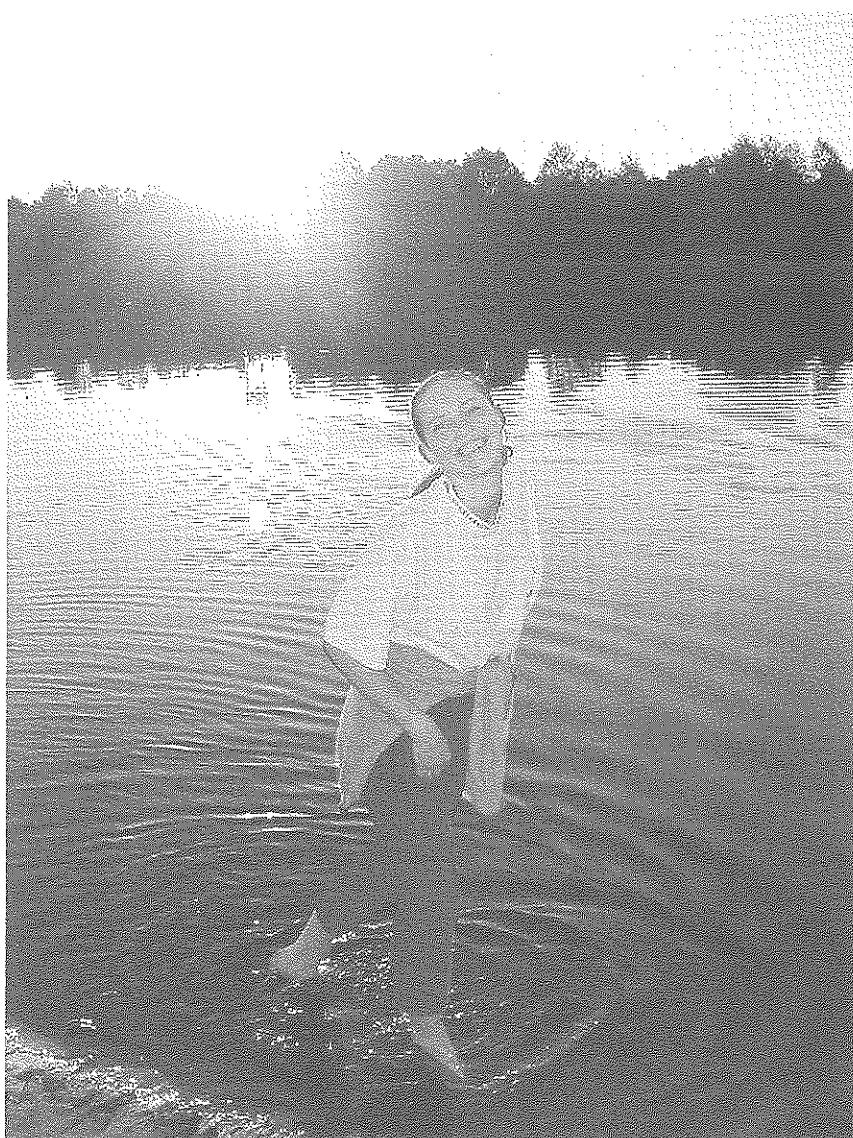


チェルノブイリ通信

2000年8月1日

No. 47

発 行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局
連 絡 先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16 (株)ウインドファーム内
T E L ・ F A X 093-203-5282
E-mail jimu@cher9.to
URL <http://www.cher9.to/>



ストーリン地区第7回目の検診報告

- *走れ雪だるま号 一枚の写真にたどり着くまでの物語
- *浅川中学での説明会
- *リューダと中学生の交流
- *イラスト 移動検診システム
- *佐々木技師が感じた移動検診の現状と今後の課題

一枚の写真に込められた

移動検診車「雪だるま号」の物語

闇夜をぬけて

午前三時、冬の時季、朝の光にはほど遠いベラルーシの空は、冷たい闇夜に覆われている。

そんな時間に、ストーリン地区のホテルに前日から泊まり込んでいたアレツクは、ベットから抜け出なければならない。四時には、ストーリン地区病院に集まつた患者たちを車に乗せて、ミンスクの病院へ送り届けなければならないからだ。

その仕事は去年の十一月から始まつた。以来、アレツクは月に二度、第二、第四木曜日に、ストーリンの患者をミンスクに送り届けている。五〇〇キロの道のりを四時間で走破し、九時にはミンスクに到着。ストーリンの患者たちはそれから病院で診察を受け、夕方にはストーリンに向けて出発。午後八時には家に帰れる。

時速一〇〇キロで移動する車があればこそ、こなせるスケジュールである。ちなみにバスでストーリンからミンスクまでは八時間三〇分かかり、日帰りは不可能。しかも一人五ドル以上の費用がかかる。

その車の名を「雪だるま」という。本当に、よく走る車である。ドアには、雪だるまのステッカーが貼られたフォルクスワーゲンのワゴン。

雪だるま号の定員は一〇名。今年の五月までに雪だるま号がミンスクへ送り届けた患者は、およそ一二〇人。日帰りで、しかも無料でミンスクの病院に行けるこの移動手段は、ストーリンの人々にとって重要なものになっている。

ベラルーシ、ストーリン地区での移動検診が始まつた一九九七年に、チエルノブイリ支援運動・九州からベラルーシ赤十字に贈呈された移動検診車「雪だるま号」は、首都ミンスクから五〇〇キロ離れたストーリンへ医療機材と医師を送り届け、また、スタディーツアーの交通手段として使用されている。



一枚の記念写真があります。

場所は、ベラルーシ共和国ブレスト州ストーリン。時刻は午前四時頃。並んでいる人々は、これから首都ミンスクの病院で診察を受けるストーリン在住の市民。そして、その後ろに控えている白い車が、移動検診車「雪だるま号」。

闇夜にぽっかりと浮かぶその光景が、いったい何を記念しているのか。今からお伝えするレポートは、この写真ができるまでの物語です。

普段は車など見向きもしない私だが、広大なペラルーシの草原や、静かに雪降る森のなかに佇むその姿に、いつしか見とれてしまうようになっていた。

雪だるま号

ペラルーンと日本の間で

雪だるま号を、患者の交通手段として活用する必要性が明らかになつたのが、二年前の七月。ストーリンを訪れ、甲状腺の手術を受けた子どもやその両親への聞き取りを重ねるなかで、一番気になつていたのが、患者のミンスクへの移動だった。私が取材した多くの人が、月収五〇ドルを下回つており、ミンスクでの診察を受けるための金錢的負担は、すぐに察しがついた。ミンスクに戻り、雪だるま号の贈呈先である赤十字ミンスク本部に、ミンスクへの定期便を提案した。が、それは提案というよりも「ストーリンの人々が雪だるま号を使ってミンスクまで診察を受けたらいですねえ」と、感じたことを口にしただけの、ほとんど社交事例に近い言ひ方だった。

何の進展もないまま帰国した私は、後悔した。なぜもう少し具体的な提案をしなかつたのか。が、その一方で、仮に提案したとして、それが支援の押し付けにならないかという危惧もあつた。「」ちらが雪だるま号を贈呈してあげたのだから、市民の交通手段として活用するようにしてくれ」と押し付けては、赤十字に対しても失礼になるのではないか。

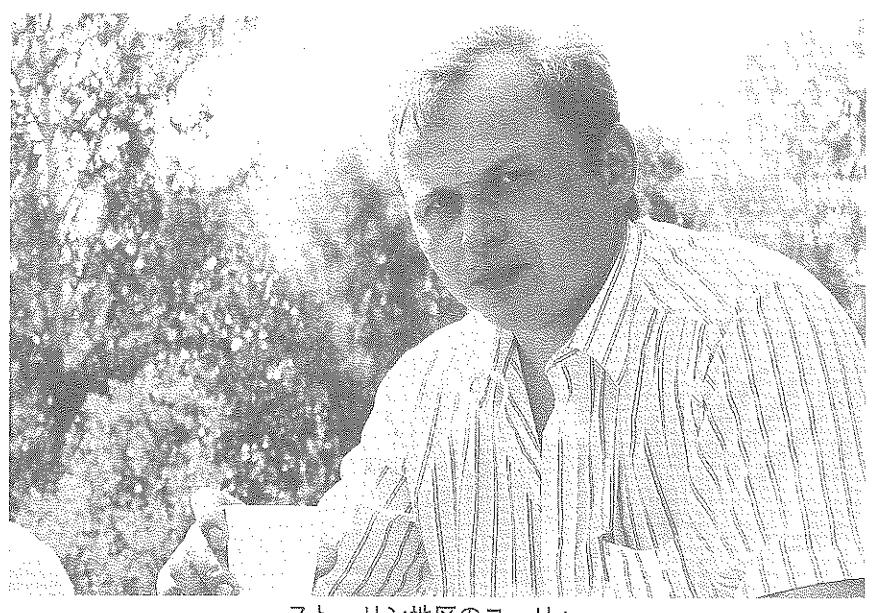
そうして、ふと、ある人のことを思いついた。
ストーリン地区、赤十字支部の代表、ユーリヤ・アルチャバコフ。はじめて会つたとき、彼が私に問うてきた言葉を今でも覚えている。

「何年間、ストーリンでの支援をされるのですか」
その質問には、一回きりの支援ではなく、継続的な関わりのなかで活動を展開したいという彼の想いが含まれていたのではないか。

「まずは、五年間」と私はありのまま答えたが、その返答を境に、彼の私たちへの応対が良くなつたと、通訳の山口さんが伝えてくれた。

ストーリンで生まれ育つた彼には、「ストーリンに住む人にとって必要なことは何か」という確かな視点があつた。

翌年、再びストーリンを訪れた私は、「雪だるま号」のミンスクへの定期便は実現できないだろうかと、ユーリヤに相談した。



ストーリン地区のユーリヤ

早く雪だるま号の実現をと、焦りつつ、人が現れるのを待つしかなかつた。ストーリンに住む人で、雪だるま号の定期便の実現を心から願う人。その人が、具体的な提案をしてくれることが、一番理想的な展開だつた。

その日の午後九時、彼は企画書を持って、私のところに来てくれた。それには年間に四三三一ドルといつ細かい経費まで記されていた。

私はミンスクに戻り、ロマノフスキー総裁に企画書を提出した。このとき、ようやく雪だるま号の定期便というプランが、単なる私個人の要望としてではなく、ス

な気がした。すぐに私は「必要経費なども含めた企画書を作つて頂けませんか」とお願いし、ユーリヤの快諾を得た。

その日の午後九時、彼は企画書を持って、私のところに来てくれた。それには年間に四三三一ドルといつ細かい経費まで記されていた。

私はミンスクに戻り、ロマノフスキー総裁に企画書を提出した。このとき、ようやく雪だるま号の定期便

トーリン住民の希望から発した企画として、ミンスク赤十字本部のテーブルの上にのつた。

「ミンスク赤十字本部とストーリン地区病院で検討します」と返答するロマノフスキー総裁の表情はしかし困惑していた。雪だるま号の運営はミンスク本部においてされなければならない。私がユーリヤに書いてもらつた企画書は、明らかにその前提を無視したものだつた。

私はすぐにその無知と非礼を詫び、心ではユーリヤのことを思つた。赤十字ストーリン支部のユーリヤは、この企画書を書いたことにより、ミンスク本部から何らかの形で批判されるのではないか。そのことが、気になつた。

それから二ヶ月過ぎた八月。スタディーツアーに参加した私は再び、ストーリンを訪れた。

ユーリヤは、赤十字を退職していた。「あの企画書を私が書かせてしまつたこと、あなたの退職と、何か関係がありますか?」と問うと、ユーリヤは笑いながら首を振つた。「え、それは関係ありません。実は、以前から退職することを考えていたのです。私には、一人の娘とまだ生まれて二ヶ月の子どもがいます。家族のために、もうと働かないといけません。でも、あなたたちの活動には、これからも個人的に協力させてほしいと思ひます」

「ありがとう」と幾度も繰り返しながら、私はユーリヤの心境を思った。退職を前にして、いつたいどんな気持ちである企画書を書いたのか。

そして雪だるま号は・・・

ロマノフスキー総裁は、迅速に対応してくれた。一〇月。その年、私について三回目のベラルーシ訪問で、雪だるま号の定期便に関する契約書を作り、赤十字ミンスク本部、ストーリン地区病院、チエルノブイリ支援運動・九州の二者の間で署名を交した。

こうして、雪だるま号は一九九九年十一月、ミンスクへの第一回目の走行を果たした。それを記念して撮影されたのが、冒頭の写真である。

今年の七月、ストーリンを訪れた私は、この写真をユーリヤから受け取つた。

「もし、雪だるま号の定期便が実現したら、その様子を写真に撮つておいてほしい。日本の皆さんに伝えたいから」と、私はユーリヤにフィルムを渡して頼んでいたのだが、まさか雪だるま号が朝四時に出発するとは思つてもいなかつた。

その時間にストーリン地区病院にまで駆け付け、わざわざ写真を撮つてくれたユーリヤには、どう感謝の言葉を伝えればいいか分からなかつた。

かくして、雪だるま号はストーリンの市民を乗せて走るようになった。

そして、まさにこの文を喜々として書いているそのとき、雪だるま号に、また新たな仕事の始まりを告げるべく、日本チエルノブイリ連帯基金の神谷さんからの

電話が鳴つた。「七月に予定されているスタディーツアー、加えて九月の小児白血病プロジェクトを実施する際に、雪だるま号を使用させて頂けないでしょうか」

すぐにミンスク赤十字に連絡をとり、「大丈夫です」と伝えると、神谷さんは「本当にありがとうございます」と丁寧にお礼を述べられた。

人のつながりが雪だるま号を走らせ、また雪だるま号が走ることにより、新たな人のつながりが生まれる。よくぞ「雪だるま」と名付けられたものだ。転がりながら大きくなつていく、と思いついたとき、まぶしい夏の光が降り注ぐベラルーシの真直ぐに伸びた道を、黙々とひた走る雪だるま号の姿が、脳裏をよぎつた。

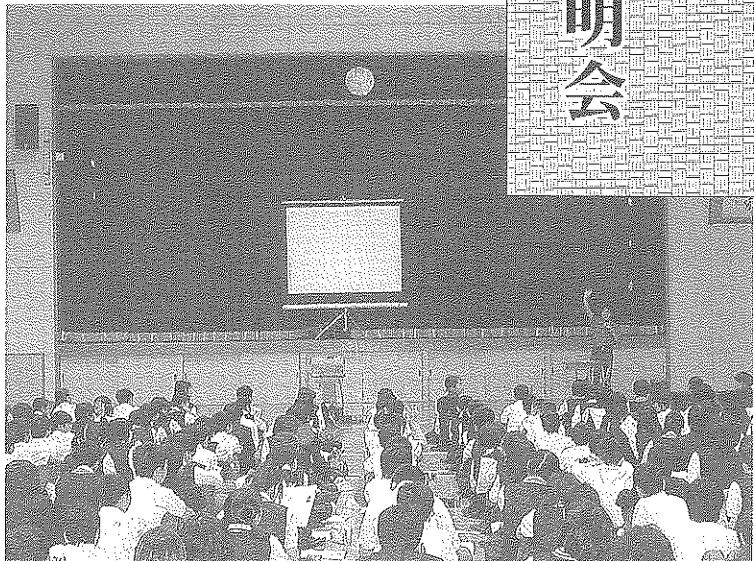
(チエルノブイリ支援運動・九州)

代表 矢野宏和



声と言葉と映像と

中学生一年生への チエルノブイリ説明会



浅川中学での説明会

いためには、映像が必要との判断で、豊かなベラルーシの自然を映したビデオを上映しました。ベラルーシの豊かな自然や土に根ざした生活に触ることは、チエルノブイリの問題を考えるうえで有効だったようです。

さらにその豊かな自然に寄せる子どもたちの想いを伝えるために、作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」からリュドミラ・チュプチクさんの「私は生きる」という作文と、甲状腺の手術を受けたりュドミラ・ウクラインカさんの作文を朗読しました。

この朗読をしてくれたのが、去年の夏のチエルノブイリへのスタディーツアーに参加した上村たか子さんでした。日ごろから朗読の練習に励んでいる上村さんの声と静かな音楽により、中学生たちが、どんどん話のなかに引き込まれていくのが分かりました。

映像を用いての直接的な訴え、朗読での情緒的な表現、そして説明によりその両方のつなぎ合わせと補足説明が行われ、説明会は終わりました。

その後、すこし時間が残りましたが、その時間内には答えないほどの質問がどんどん出されました。

た。

とにかく最後まで聞いてくれればと思つていたので、この反応には驚きました。「まさか質問が出てくるとは思つていなかつたので、とてもうれしかつたです」と津島さんは語っていました。

「中学一年生にチエルノブイリの説明をしてほしい」チエルノブイリ支援運動・九州の会員でもある浅川中学校の定池先生から、ある日そんな依頼を受けました。気軽に引き受けてしまつたあと、中学一年という年代の子どもたちが、チエルノブイリ原発事故当時、まだこの世に生まれていないという事実に、ハツと気付いてアセりました。

果たして最後まで聞いてくれるのだろうか?梅雨時の蒸し暑い体育館で、グッタリとうなだれる生徒たちを前に、説明だけが空しく聞き流されていくのではないか。そんな不安を感じました。

いかにして分かりやすくチエルノブイリの問題を伝えるか。それが重要なポイントでした。そして、まずフリースクールの活動を通して子どもと接する機会が多い津島運営委員が説明役に選ばれました。

当日およそ三〇〇人の中学一年生を前に、津島さんは冗談を交えて雰囲気を和らげながら、言葉を慎重に選び、丁寧に説明していました。

説明会は全体として一部構成で、一部がチエルノブイリ原発事故の様子、二部がベラルーシ共和国での医療支援活動について報告しました。

時間は全体で一時間半。中学生たちを飽きさせな

大切な友だちへ ～日本とベラルーシをつなぐ手紙～



左から矢野薫さん、武原妃佐さん、篠原光さん

浅川中学での説明会の後、生徒たちからビデオレターが届いた。
それは、甲状腺の手術を受けたリューダ（ベラルーシ在住スタッフ）

への想いを伝えたものだつた。

チエルノブイリ支援運動・九州の医療検診チームが、ベラルーシへ出発する三日前に届いたそのビデオには、習い始めたばかりの英語で、懸命に想いを伝えようとする中学生たちの姿があつた。

ベラルーシで、リューダはそんな中学生の姿を見つめ、言葉を受けとめた。そして今度はリューダが自らの想いを英語で語る。それは再びビデオレターとなつて、生徒たちへと届けられた。

ここにまた、新たな交流が生まれる。

私は知りませんでした。

事故があつたことも、事故のために苦しんでいる人がいることもあります。

私は、この世には強い人間も弱い人間もないと思つています。人間は、どこか強く、どこか弱いものだから。

あなたたちは今、ふつうにくらしている。私たちより、数倍強い。でも弱い部分をかくさないで。つらかつたら言つてほしい。

一人じゃないんです。

みんな。私はここにいるよ。あなたもそこにいる。そりやあ、会えないし、直接、話せない。だきしめてあげることもできないよ。でも聞くことはできる。つらいこと。苦しいこと。ちゃんと聞く人がいるんだから、一人なんて思わないで。くどいけど、あなたは一人じゃない。

（一年三組 矢野 薫）

私はこんな事件があつたなんて知りませんでした。放射能という言葉は聞いたことはあるけど、あまり深くは考えていませんでした。日本でもこの前こういう事件がありました。何人かの人が亡くなっているのに「私には関係がない」なんて思つていました。けど、放射能でガンになつたりするなんて、ぜんぜん知りませんでした。こんなに苦しんでいるなんて、こんなに大変なんて、こんな事件があつたのに気にもとめなくて・・・。事件で亡くなつた人になんて言えばいいのか分かりません。

私は事件でまだ苦しんでいる人の、何か役に立てるかな。

これからも一日一日を大切にして、生きて下さい。元気でいてほしい。わたしはそう願っています。

（一年六組 武原 妃佐）

皆さんと私たちは、放射能という同じ問題を抱えています。でも、決して諦めたりしません。私たちには希望があるのです。

東海村といふところで事故が起こりました。隊員の人人が亡くなつたりしました。

ベラルーシの人たちの気持ちは、私たちにも分かります。

戦争で広島や長崎に原爆が落ちました。たくさん的人が命を奪われました。一瞬にして。私たちもそんなことを二度とおきないようにならないと思います。

元気を出してくださいね。

私たちも今、後悔しています。人間はそんな恐ろしいものをつくりだしたのか。そんな恐ろしいものつくったのか。そんなのつくっても、みんなの役に立たないのに。そんなのがなかつたら、ベラルーシの子どもたちは、のどを切つたりしなくともよかつたのにね。

だから、私たちは後悔しているのです。

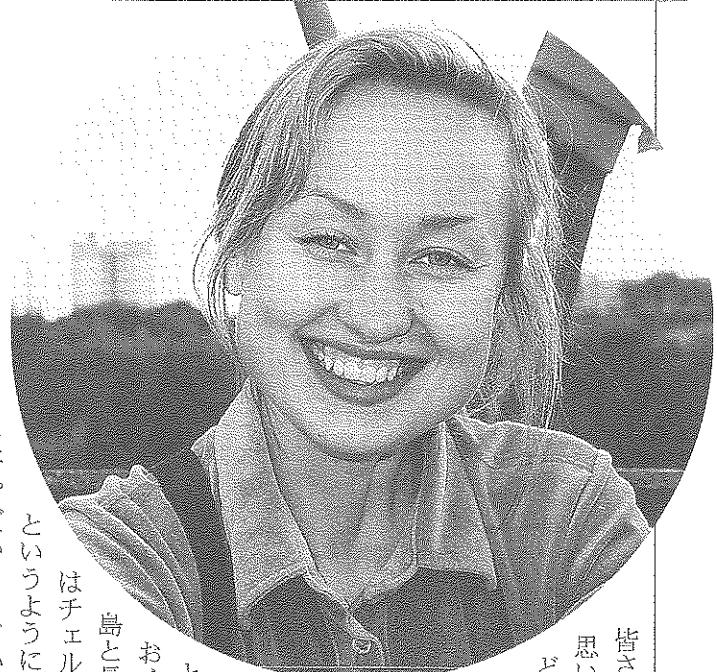
でも、落ち込んでいてもなにも起こりません。きっと、子どもたちも元気になり、もとのベラルーシにもどるよ。

絶対！

(一年七組 篠原 光)

浅川中学校の皆さんへ

—リューディーからの返事—

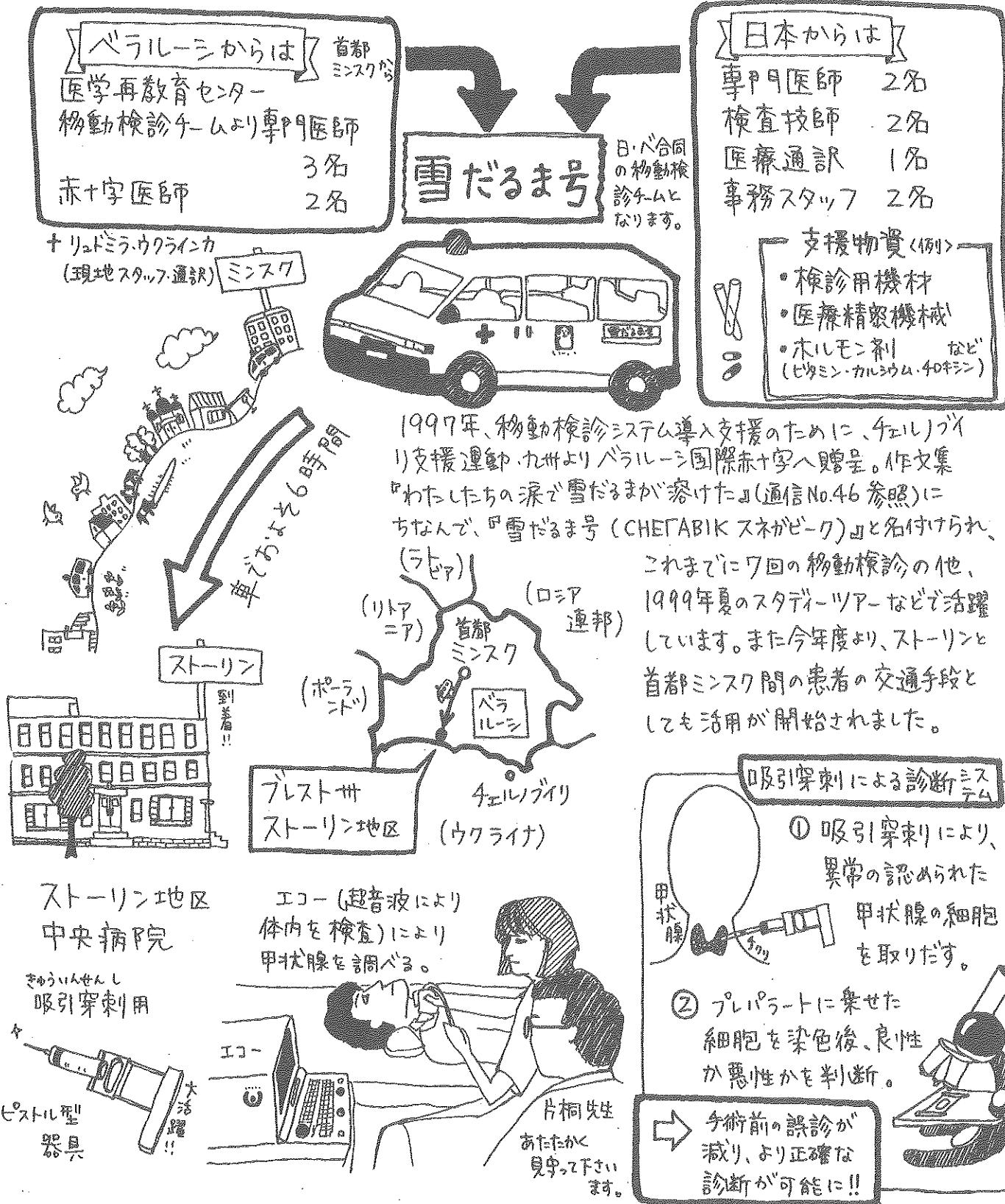


皆さんとお話しできて、うれしく思います。お手紙とメッセージ、どうもありがとうございます。とても素敵なものでした。とても大切なものでした。受け取った時はとても驚きましたが、皆さんと知り合いで、つながりを持つことはとても大切なことだと思っています。日本の皆さん方が私たちやベラルーシのことと一緒に理解してくれているのだということを、私たちは知っています。だからこそ私たちは、他の国の人々と一緒に理解しあえるのです。もちろん、私たちは全てを失つてしまい、諦めたりもしていません。それは、放射能の被害で苦しんでいる日本の人たちが諦めず、よいお手本となってくれているからです。私たちは希望を持っています。その希望があるからこそ、私たちの次の時代の子どもたちや地球は大丈夫だと思うのです。常に恐ろしい思いをしながら生きていいくことなどできないのです。

最後まで聞いてくださいありがとうございました。そして、親切に英語で書いてくださったメッセージ、ありがとうございます。それでは、また。お元気で。勉強の方も頑張ってください。皆さんの成功を祈っています。また何かあつたら、英語でお手紙ください。待っています。本当にどうありがとうございました。

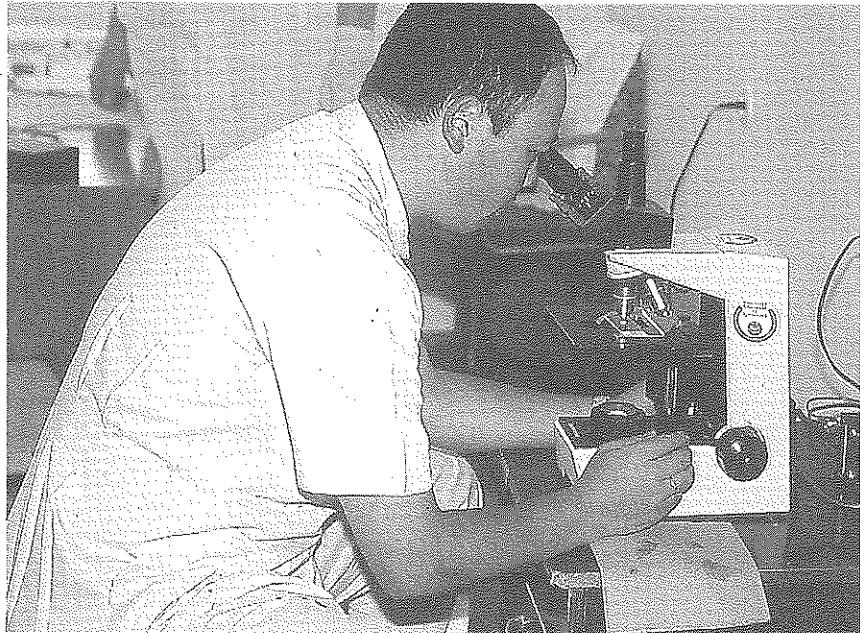
リュドミラ・ウクラインカ

ウト ごお伝えある ベラルーシでの移動検診システム



りんしょうけんさぎ 臨床検査技師の技術を伝える

佐々木技師が感じた 移動検診の現状と、今後の展望



甲状腺の検診を行う佐々木技師

チエルノブリ原発事故が引き起こす甲状腺ガン。その検診において、実際に医師が甲状腺の細胞を探取し、ガン細胞の有無を確かめる細胞診には、臨床検査技師により甲状腺の細胞を適切に染色される必要がある。

正確な診断を行ったためには絶対に欠かせない細胞の染色。それを現地の医療スタッフに伝えることが、ストーリン地区第七回移動検診に参加した佐々木栄司技師の大きな目的だった。

「将来、ストーリン地区病院において、ベラルーシの医療スタッフ

だけで検診を行うためには、この染色の技術が確かでなければならぬ。なんてきれいな所なんだろう！」首都のミンスクから一般道を車で移動すること、約四時間半。途中の車窓から見た景色や、ストーリン地区のホテルにチェックインの後、周辺を少し散歩した時の印象だった。

私が参加することになった経緯は、今回で五回目の検診活動の参加となる、永寿総合病院の片桐先生のお誘いによるものだった。あらかじめ片桐先生からは、だいたいの検診活動の内容や、ホテルでの生活のことをお聞きしていたので、自分の中では戸惑う事もなく、スムーズに現地での活動を始めることができた。

今回の医療活動での私の役割は、甲状腺の細胞診の検体処理と染色、さらに時間に余裕があれば、細胞像の鏡検指導まで行うことだった。

通常、甲状腺の細胞診は、腫瘍部に直接針を刺し、細胞を探取する「穿刺吸引」という形がとられ、良性や悪性の判断を行う。今回の検診から穿刺吸引に使用した注射針を洗浄後、その洗浄液をフィルターで濾過し、検体処理する方法を新たに導入した。この方法は、私の勤務する病院では、小さな腫瘍の穿刺時に行っている。たとえ少量しか採取されない腫瘍細胞でも逃すことなく標本に作成できる利点を持ち、診断に極めて有効な方法である。

「ない」そんな想いを抱き、ベラルーシの医療事情にに戸惑いながらも、真剣に技術を伝えようする佐々木技師の情熱は、やがてベラルーシの医療スタッフの姿勢を変えていく。ベラルーシの医療スタッフが自力で確かな検診を行うために必要な技術を伝えた佐々木技師からのレポート。

はじめての検診活動



染色を指導する佐々木技師

染色の技術を伝えようと結構意気込んで行つたにもかかわらず、現地スタッフの誰を対象に指導すれば良いのか?という問題に直面した。染色の説明をしても誰一人としてノートを取らなかつたのである。自分では、現地が細胞診を必要としているのだから、今回のような依頼があり、私も参加することになつたのだと思つていた。

私の口からは次の言葉が出ていた。「このパパ二口染色は細胞診の分野では最も代表的な染色であり、細胞の特徴を理解するのに極めて有効である。今はこの地区に必要は無いかも知れないが、今後、甲状腺の細胞診を始めるのなら絶対に覚えなくてはいけない染色である。だから、今覚えなさい!!」これは、命令だ!!この後、彼女たちは一生懸命覚えてくれた。

ストーリンの検診で、悪性が示唆された患者さんは、術前の検査や手術を受ける為、直接ミンスク第一病院に運ばれる。そのことで、次の様な悪循環が生まれているのではないか?

まず地方では細胞診断する医師がないことが第一の問題であり、さらに、診断する先生がいなければ、必然的に地方レベルでは細胞診を必要としない状況に陥る事になる。医師や技師の中に「必要以上に知識を覚える必要に迫られていない安穏とした雰囲気」を感じた。もつと、きつい言い方をするのなら、染色開始時、一人の口から「患者さんはミンスクに行くからここで細胞診はしないし、染色もしない。だから、私達は覚えなくても良い」といった内容の言葉が出た。今回の検診での現地スタッフの方々は、「私達の補助業務に徹しようとする姿勢」を感じた。そうなると、こちらが細胞診を指導し技

絶対に伝えなければならない技術

初めての参加ではあつたが、検診がスタートして全体の流れはすぐに掴むことができた。新しく導入した検体処理方法を、一緒に同行した検査技師の小林さんに引き継ぎ、私は検体の染色に取り掛かつた。その時、私はストーリンに来て初めての戸惑いを覚えた。

戸惑い: 誰に技術を伝えればいいのか

「エルノブイリ支援運動九州」のボランティア活動に同行するのは、ミンスク第十病院の内科医師の方々が主であり、エコーの所見や患者診療のほうを覚えるのに精一杯の感じはある。細胞像は覚えたい方は覚えたいが、検診期間内に実際そこまでの時間的余裕はないのである。

より良い診断のために

細胞診の必要性と人材育成

私の考えは、「診断する医師と検体処理や染色をする技師は、常にペアでなくてはならない」ということである。エコーア像を見て針を刺し、検体処理を行ない染色し、さらに診断を下す。一人の医師で出来ない事もないが、そこに良き技師の存在は必要不可欠なものと思う。

通訳の山田さんや代表の矢野さんらに話したことだが、細胞診を本当にこの地域に根付かせたいのであれば、まず、「甲状腺を診断するんだ」という強い気概をもつ医師を指導する必要があるのでないか？そ



検診を終えて記念撮影

の医師が診断に耐えうる標本作りや染色を技師に教え、良き診断医が良き技師を育てるのだと思う。

夜、片桐先生とウォツカを飲み語り合った。「佐々木君、最初から結果を望んではいけない。ここまで（現在の検診状況）になるのに私は、五回要した。あせつては、だめだ。」とても優しい口調で先生は言われた。「確かにそのとおりだな」と思った。矢野さんに「ボランティア団体の支援方針は、いろいろあるとは思うし、物資の供給をする方法も一つだが、人材を育てるような支援方法も今後の活動計画に必要なかも知れない」と話した。

「継続は力なり！」

私は、縁あって甲状腺の専門病院である伊藤病院に勤務させてもらっている。自分が細胞診に携わるようになり十三年目に入った。毎日の業務で培つた技術が、「少しは世の中の人の役に立てたのかな」と考えると少し嬉しい自分がいる。私は良き指導者に恵まれたおかげで、今の自分があると思う。ありがたいと思う。もし、また要請があるようならば、参加させてもらい、少しずつでも前へ進みたいと思う。「継続は力なり！」。

最後に、今回の参加に伴つて良き理解をしてくだつさた伊藤公一院長をはじめとする職場のみなさん、チエルノブイリ支援運動・九州のみなさん、そして、バックグラウンドにおられる多くの皆様に、貴重な体験をさせて頂いた事を深く感謝致します。

編集後記

浅川中学での説明会に際して、私はリュドミラ・ウクライナ力を紹介した記事を、資料として送つてきました。

「少し手を加えます」と中学校の方からは事前に確認があり、私も「どうぞ」と伝えてありました。が、当日その「手を加えられた」自分の記事を見て、私は反省せざるを得ませんでした。

レポートに記された多くの漢字の横には、ルビがふつてあつたのです。それは、より分かりやすく内容を伝えたいという先生の熱意と配慮の表れですが、しかし、それは本来なら編集人である自分がしておかなければならぬ作業でした。

浅川中学校での説明会。振り返つて想うことば

正しく言葉を伝えることの大切さでしょうか。

慎重に、そして丁寧に言葉を選んだ津島さんの説明。また言葉を響き豊かな声に乗せて生徒たちへ届けた上村さんの朗読。明らかに言葉はある力を持つて伝わっていきました。そして、その感動を源に、中学生たちはベラルーシのリューダにメッセージを書き、それを直に届けるために習い始めたばかりの英語で表現しました。

伝わり、広がりゆく想いと言葉。その様を目の当たりにして、せめて自分ができる努力として、今回の通信には、できるだけルビをふるように心がけました。

が間違つてなければいいけれど・・・。

チエルノブイリ通信 編集人

矢野 宏和

ありがとうございました。

相羽美香子 青木敬子 浅田穂味の素労働組合 朝永洋子 荒木潔枝 芦原純子 荒井幸子 有賀淳子 有迫千恵美 有光靖惠 有吉みどり 粟屋千恵子 壱岐敦子入田すま子 諫元富子 石井トミ子 石川昭子 伊東眞司 伊藤利恵 井戸川智恵 稲森史子 稲吉清子 井之上裕美 井上美由紀 井倉順子 今井涼 岩井弥生 岩永みゆき 岩間博義 岩本美恵子 岩屋広子 上川倫江渕和永みゆき 岩間博義 岩本美恵子 岩屋広子 上川倫江渕和植草みどり 上田郁 上野裕子 上野三佳子 上野由美 梅澤洋子 梅野千枝子 浦中久美子 永長伴子 江頭光科医院 篤子 小野尚子 (有)オフィスケア北九州 小山いく子 子 王美紀 大木佳子 大田澄子 大久保仲子 大塚順子 子 大森広明 大山静香 岡部悦子 小川真由美 奥平弘子 梶村静江 香月英美子 桂木美由紀 かどもと眼科医院 カタログハウス母子支援基金 金山涼子 金内宣子 美香 金田眞理 狩野浪子 亀井広子 仮屋園幾代 川英治 河井万里子 河上しげみ 片岡直樹 川崎君子 川島則子 川嶋山紀 河野由巳香 河端則子 河原畑宣子 神田淳子 神法子 菊池順子 岸野稔子 岸本ゆかり 木下政彦 グリーンコープ生協おおい た組織委員会 工藤章子 久保要子 久保田昌子 久保山彬子 黒岩桂子 黒木裕子 桑田清美 桑野由紀子 小出としえ 光英寺 西藤勝信 古賀教子 小塩賢治・ 恵理子 小谷麗子 後藤真美 小西郁子 小西順子 南三重子 近藤春代 権藤秀子 西井田智枝 斎藤恵子 松スマ 坂井英生 加陽子 坂中浩子 坂元あけみ 相良佳子 佐竹順子 佐竹悠紀 佐藤恵美子 佐藤しほ 佐藤寿恵子 進一 佐藤ちさ 佐土原眞知子 椎葉公子 重松スマ 岸田みか 道山窯 ジヨンソン伸子 白石生子 杉下 啓恵 白岩佳子 白水悦子 末廣治江 須上幸子 菅原滋子 鈴木敦子 隅田三和 関根涼子 瀬戸さゆ

※二〇〇〇年三月八日(木)二〇〇〇年八月六日(木)まで
たくさんのご協力ありがとうございました。

り瀬戸陸三 曽我部かず子 園久美子 高木悦子 木博子 高木恭代 高島康子 高野真理子 高橋由紀子 竹田恵子 竹田節子 武田孝子 田代栄二 立石千絵 立石肇 田中美和子 田上朋子 丹田節子 土持秀男・由利子 堤安佐枝 坪井秀雄寺地志保 德永ヨウ 友野明 美子 友松功一 豊田直也 永井和代 長崎県職員組合女性部 長沢美知代 中島まゆみ 長田いをり 中田淑子 中富久美子 永野隆 中村栄子 中村佳代 中村志津 香 中村照子 中村洋子 中村弘子 中山たまき 中山美佐子 成追秀美 成松紀枝 西育美 西富巴 西村以久子 西村 恵子 村みつ江 西村みどり 西本順子 二宮幸枝 日本キリスト教団・京都基督教 野田 邦子 野村文子 橋口日出 長谷川明子 泰素子 服部節子 華井紀子 渡岡和子 渡田ハツ子 橋口日出夫 原田佳寿子 原森泉 伴信子 引田良子 楠口裕子 久田文子 檜原こひつじ幼稚園こひつじ基金 代表 有吉光寛 野村文子 橋口日出 長谷川明子 泰素子 服部節子 平井かおり 平井紅子 平島櫻子 平田治久子 藤本博子 深江陽子 深堀ミチ子 深水陽子 福田節子 福本勅子 福山知恵子 藤井千世 藤田幸子 船越都 古野竹則 日置美穂子 宝住真知子 堀寿子 本田スマ子 平井かおり 平井紅子 平島櫻子 平田治久子 藤本博子 深江陽子 深堀ミチ子 深水陽子 福田節子 福本勅子 福山知恵子 藤井千世 藤田幸子 船越都 古野竹則 日置美穂子 宝住真知子 堀寿子 本田スマ子 松本 清子 松本みね子 松本美穂子 松本素子 三木紀代子 右田幸子 溝上健一郎 峯恭子 宮川蕉子 宮松井玲子 松尾 菊惠 松里英男 松下竜一 松田真紀子 松田正憲 厚子 松永清美 松村知暁 松室淑子 松子 松田正憲 厚子 松永清美 松村知暁 松室淑子 松子 松田正憲 厚子 松永清美 松村知暁 松室淑子 松子 向井億人 向原明美 村上稔子 村田聰子 室屋芳乃めぐみ保育園職員一同 毛利明子 本岡真利子 森多寿子 森川キミ工 森美津子 森木美樹 森永紀代子 門司三智子 安岡繁子 矢野通子 八尋洋子 山口幸子 山口朋子 山口英子 山口真代 山崎隼史 山崎芳末吉 山田幸子 山戸美徳 山本貞美 山下千賀 山本里 美山本マチ子 山本美智子 喜岡笙子 吉田佳織 吉田梨枝子 吉武加代 吉中澄子 吉野美紀 吉本順子 吉田和仁幸子 和田

チャルノブイリ支援運動・九州の事務所の移転について

チャルノブイリ支援運動・九州の事務所が移転しました。

お問い合わせ、ご連絡などございましたら、今後は下記の住所にお願い致します。

〒807-0052 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16 (株) ウィンドファーム内
TEL/FAX 093-203-5282

募金などの振り込みは 加入者名 チャルノブイリ支援運動・九州
郵便口座番号 01770-1-65328